
脇役主人公から見た彼ら

笑えばいいと思うよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脇役主人公から見た彼ら

【Nコード】

N1650S

【作者名】

笑えばいいと思うよ

【あらすじ】

主人公が美少女達囲まれて青春を送ります。

嘘です。

始まり（前書き）

初めてのラブコメ？です。

駄文ですが、よろしくお願ひします。

始まり

いきなりですが、今俺はと~~~~~っても機嫌が悪いです。えっ何故って？それは、海より深~~~~~いわけがある。……………すいません、嘘です。ただの僻みです。

だって普通、学校に登校してくる時に美少女二人とイチヤイチャするヤツがいますか？いいえ、いません。多分、……………いないと信じたい。という事でヤツに襲撃することにしましよう。

「準備はいいか、お前ら！」

『おお~~~~!!』

何処からか、いきなり現れた謎の軍団。……………いや訂正しよう、モテない奴らだ。

「よし、突撃だ!!」

俺が合図を出すと、モテない軍団は一斉にアイツに向かって行った。

ここで、俺の自己紹介でもしよう。名前は高橋 昌哉どこにでも居

る普通の高校生だ。っと自己紹介している内にモテない軍団は倒されてきた。俺？俺は、行かないよだつてアイツ有り得ない程の身体能力あるから、わざわざ倒されるの分かってるのに挑まないし、それに俺、もやしっ子だし（笑）そろそろアイツに声かけるか

「よっ、朝から大変だな。」

「おい、何が「よっ朝から大変だな。」だよ、これ全部お前の仕業だよな？」

今俺が、声かけた奴、それがスーパーイケメンボーイこと木村 悠司 何でも完璧にこなし、性格も完璧、そして、鈍感。どこそこの主人公みたいにモテるヤツだ。

「それって本当なの？」

「本当だった許さないよ」

今俺に話しかけてきた奴らは、東山 奈央と中谷 美奈だ。何故悠司に惚れているかというと、ナンパされている所を助けられてみたいな感じだ。

「よく聞いてくれ、東山さん、中谷さん。」

「西山だよ。」

あれ？西山だっけ、どっちでもいいじゃん。

「とにかく聞いてくれ、悠司が襲われている時は、必ず君達を守るはずだ、それに…」

俺は、二人に近付きボソツと言った。

「怖いとか言っつて抱きつく事だつて出来るチャンスがあるじゃん。しかも、悠司が闘ってる姿見えるし」

二人はしばらく考えて

『うん、じゃあ良いよ。』

「そうだ、もっと言っつてやれ…っつて、ええ~~~~~~~~!!?」

何許しちやっつてんの？さっきまで、怒っつててくれてたじゃん。」

何故か急に悠司が騒だした。

「じゃあ、俺先に学校行くから。」

悠司達に手を振りながら、俺は、学校へ向かった。

学校に着き、自分のクラスに入って、席に座るといきなり悠司よりは劣るが、かなりのイケメンが話かけてきた。

「相変わらずだよなあ〜自分は動かないで他の人を使って襲うなんて。」

「そんなに褒めるなよ、照れるだろ。」

「いやいやいや、褒めてないし、どちらかと言えば貶してるから。」

そうだったのか…俺は褒められたと思っただんだが。……ここで、今俺と話をしているイケメンは、藤森 大地。陸上部のエースらしい。

「そうそう、俺が追わせた女子達はとうだった？」

すると大地は、やはりお前かみたいないな目で見てきた。

「やっぱり、マサだったんだな！あれ結構、怖かったんだぞ！…こっちは全力で走ってるのに、ピツタリつと付いてくるし……」

思い出したのか、顔が真っ青になっていた。確かに怖いよな、陸上部のエースが全力で走ってるのに、付いてくるのは………すげえな恋する女子の力は、

「おはよ〜」

おや、リア充こと悠司が爽やかに登場してきた。しかもクラスの子達の大半の目がハートになってるし……リア充なんて氏ねばいいのに。てか氏ね。

「死ね〜〜〜〜悠司!!」

等と思っていると、1人変態が悠司に殴りかかった。しかし、悠司にカウンターを喰らい一発K.O.した。俺は、変態もとい亮輔に近付いた。コイツの名前は、飯塚 亮輔、……とにかく変態だ。

「お〜い。大丈夫かあ？」

亮輔の顔を叩きながら聞いた。

「全然大丈夫たぜ」

意識が戻ったのか、俺に向かって答えた。

「チツ…無事なのかよ。」

「えっ、心配してくれたんじゃないの？っーかいつまで叩いてるんだよ!」

「ん？あつ悪い悪い、しっかしお前もよく懲りないよなあ」

「男にはやらなければならキーンコーンカーン…」
亮輔が喋ってる最中にチャイムが被る様に鳴った。すぐに担任がやって来てホームルームが始まった。

時間が経ち今は昼休みだ。

「ねえ、悠司一緒にお昼食べようよ」

中谷さんが悠司を誘っていた。

「違うよ、悠司は私と食べるの！」

対抗して、東山さんでいいんだっけ？が悠司の左腕に抱きついて、中谷さん向かって言っていた。すると中谷さんも右腕に抱きついて、ギヤーギヤー言っていた。ちなみに悠司は困惑した表情してる。

クラスの男子達は震えながら『リア充死ね！』と襲おうとしていた。俺はとめにはいった。

「待て、お前達。」

するとクラスの男子達は「とめないでくれ」

「お前はヤツの味方なのか」

「違う、このままでは負けてしまう。だから、筆箱の中からコンパス、ハサミなどを使って攻撃するんだ!!」

俺は無駄に熱弁をした。悠司は俺の発言を聞き「マジかよ」と言い逃げて行った。

「隊長、ヤツが逃げました。」

いつの間にか、隊長になってるし

「絶対に、ヤツに対して一人で挑むな！複数で攻撃をしろ。」

『はっ』

何処の軍隊だよ…そうだ、亮輔がいなかったな 俺の記憶が正しければ、放課後、屋上で告白してる筈だけど。何故わかるかって？だってアイツ、悠司達がイチャイチャしていた時に、俺も彼女作ってやるとか言っでどっか行ったからね。これは行くしかないね。

「出来れば、告白してる時に入りたいな。」

まあそんなに上手くいかないよな、そう思い屋上の扉を開けた。

「ごめんなさい。」

開けた瞬間に拒否られたし…なんて思っていると、亮輔らしいヤツが泣きながら、走っていなくなった。さて、亮輔が告白した人であるか。

「あっ、まゆまゆじゃあ、あ〜りませんか？」

「まゆまゆ言うな！てか、昌哉は何の用なの？」

屋上に居たのは、通称まゆまゆ（まあ俺しか呼ばないけど）こと、
相澤 真由。結構な美少女

「告白かもよ。」

まゆまゆは、すぐに否定してきた。

「ないないない、アンタが告白してきたら、ここから飛び降りるわ。」

「マジで、好きだ。はい飛び降りて」

まゆまゆは、疲れた様に溜め息混じりに

「…完全に飛び降りることを、楽しみにしてるよね。」

つと言った。俺が、帰ろうと屋上を出ようとするとまゆまゆが話かけてきた。

「ねえ久しぶりに一緒に帰らない？」

と恥ずかしがりながら、つーか中学の時も数えるぐらいしか一緒に帰宅してないし、

「じゃあ、鞆取ってこようぜ。」

その後、教室に鞆取って下校した。

イケメンって氏ねばいいのに

何かさ、理由はないけどさ

「妹が欲しかったな」

「何兄貴言ってるんだよ！？しかも実の弟が居る目の前で！！」

今、俺の前で騒いでいる奴こそ 高橋 陽斗 通称ハル。歳は1つ
違いで、何故か俺と同じ学校に進学してきやがった。しかもイケメ
ンときた、両親は普通だ……いや、母親は違うか。とにかく何で
兄の俺が普通に弟がイケメンなんだ。

「ただ、弟より妹の方がよかったと思っただけだ。」

「それ弟の前で言いますか！普通。それに弟の方が良いことがある
じゃん。」

「ほう、言ってみろ」

「えっ………気を使わなくて済む。」

「家族って、そうじゃあない。」

「後………そう！一緒ゲーム出来る。」

「別に妹でも出来るじゃん。」

「うっ……」

勝ったぜ、何に勝ったのかよく分からないが、やっぱり弟をいじるのは、おもしろい。

「ねえ、兄貴話変わるけど好きな人出来た？」

ハルがいきなり質問してきた。しかも俺に恋の話、今まで全くしなかったのに、はっ！…これはまさか

「何だ、好きな奴でも出来たか？」

まっ つつても毎回聞いてもいないって言ってるし、違うか…これで次の日に彼女を連れてきたら、マジで怒りますね、てか埋める。

「それが………何て言うか…一目惚れ…かな、多分先輩だと思うんだけど。」

「どんな感じだ？」

「えっ、無理絶対教えない！」

コイツ何を勘違いしてるんだ？ あゝ俺が邪魔すると思ってるのか、人の恋を邪魔するほど馬鹿じゃあないし多分。

「何勘違いしてるんだ？俺は情報を教えてやるって言ってるんだぞ、知ってる奴ならな。」

「そうなの？じゃあ……」

「多分、そいつは、長谷川 亜稀だ。」

しかし分かりにくい特徴だった。髪は肩より長く、色は黒、とか美人とか、守ってあげたいとか、もっと分かりやすい特徴はと言ったら、周りの人達が顔を赤くして中には、鼻血を出してる人もいた。で、分かった、噂では聞いてたけど本当だったんだ、確か笑顔を見たら男女問わず大抵の人は鼻血を出すって……俺、面識ないな。

「ハルには、嬉しい情報、確か、彼氏はいない。クラスは2-1だったはず」

ハルはガッツポーズをしていた。あっちなみに俺3組ね、まゆまゆは、1組。関係ないか……

「マジで、ありがとう兄貴！」

ハルが笑顔でそう言った。やめろよ、そんな笑顔で見られた……

……殴りたくなる。

「兄貴、その振り上げてる拳を下げて、恐いから。」

……どうやら、実際に殴ろうとしてたみたいだ。反省だ。それにしても、暇だ

「ハル、暇だから外に行ってくるわ」

ハルにそう告げた。とりあえず、デパートに行くか。

デパートに着いてみたら、俺と同じ学校の制服の人がナンパにあっていて。

ん？あれは、さっき話して 長谷川 亜稀ではないですか、噂すれば何とやらってか？ あれ？何でこっちを見てニヤッと笑って、こちらに来やがった。………しまった！今日学校が午前中に終わったから制服のまま来てんだ！絶対に巻き込まれる！！逃げなきゃ、ってもう遅かった。目の前に長谷川いるし、しかもナンパしてたヤツも付いて来たし、こんなにいらねえおまけ初めてだし。

「遅いよ、ずっと待っていたんだからね。」

長谷川が彼女みたいに言うてきた。つーか今日初めて話したよね。

「アンタこの娘の何なの？」

ナンパしてたヤツが聞いてきた。 そんなの

「他人「彼氏」です。」

何か被されたし、しかもナンパしてたヤツをよーく見るとイケメンだし、イケメンがナンパしてんじゃあねえよ！。

「いいか、そのない頭よーく使って考えてみる、俺がこんな美人の彼女がいるはずないだろ！！！」

「お前それって、説得しようとしてるのか？」

若干怒り気味でいるし、何か間違えたか？ 後で長谷川は笑っているし

「だいたい、お前はイケメンのくせに何ナンパしてんだよ！お前のぐらいのイケメンなら、ナンパしなくても彼女の1人や2人出来るだろうが！」

「……………何か、すみませんでした。」

「分かればいいんだよ。お前なら、いい彼女作れる、頑張れよ。」

「はい、ありがとうございます。」

ナンパしてたヤツはいなくなった。……………馬鹿で良かった。

「助けて、ありがとうございます。」

長谷川が笑顔でお礼言った。……………確かにこの笑顔は凄いな。

「あん？俺ただ巻き込まれただけだし、じゃあな。」

違う所に行こうとしたら、右腕を掴まれた。

「買い物するために、ここにいたの？」

「いや、だが「そうなの、じゃあ行こうか」「はあ」

長谷川に無理矢理買い物に付き合わされる事になった。

何て

「ねえ、これ何てどうか？」

只今、長谷川に強引に連れて行かれて洋服屋に居ます。何故に俺に似合っているかなどと、聞いてくるんだ？今日初めて話したヤツにしかも普通、一緒に買い物とかするか？はあ、まっ暇つぶしにはなるか、

「うわゝゝ超似合ってる」

すんげえゝ棒読みで言ってみたくなったから、言ってみた。どういう反応するか楽しみだ。

「でも、こっちも良いな……」

めっちゃスルーされたし、意外に悲しいもんだな……ん？待てよ今なら、長谷川は服に夢中だから逃げるのが「ドコに行くの？」……出来なかった。

「よし、やっぱりこっちにする。」

やっと決まったか、これで解放される、………何故？長谷川は会計しにレジに行かないで、まだここにいて？そして俺の方に服を差し出してるんだ。

「俺に払えと？」

「普通は、彼氏が払ってくれるんだよ。」

「驚いた、いつの間に彼氏になったんだ？俺は、」

「そんなに驚く事かな？」

「ああ、大の大人が真面目に玉子焼きを『おうじ焼き』って読むぐらいの驚きだ。」

それぐらいの驚きは、あるだろう。何せ今日初めて会話したヤツを彼氏と呼ぶのだから。…何で長谷川は笑ってるんだ？

「あはは、面白いね君！そう言えば自己紹介まだだったね。私は長谷川 亜稀。亜稀って呼んでね。」

笑顔で言われた……その笑顔は反則だな、やっぱり。しかも名前で呼べとか

「分かった長谷川、俺は、たな「高橋 昌哉でしょ。」……」

何で知ってるんだ？偽名を使おうとしてたのに被されたし。

「何で知ってるの？」

聞いてみるのが、一番だろ。俺ってそんなに目立った行動してない

はず

「逆に知らない人の方が少ないと思うんだけど…」

案外目立っていたらしい苦笑いしながら答えてきた。

「つーかさあ、悠司に買って貰えばいいじゃん。」

言って

さあ、問題です。なぜここで悠司の名前が出て来たのでしょうか？

正解は、悠司のハーレムメンバーだったからです。

簡単でしたね。皆さんわかりましたか？

えっ？弟と話してる時に特定の彼氏はいないのって言ったって？ まあ、別に間違ってることはないし、まだ悠司の彼女ってわけじゃないんだし。しかも2年生になってクラスが違くなってから悠司に会いに来てないんだよね。学校の時は…だけど、それ以外の時に会ってるかもしれないけどそれは知らん！あまり興味が無いから全然調べなかったし、でもチャンスはあると思うんだけどね（笑） 何となくだけど

それよりもどんな反応するのか、楽しみだなあ

「悠司って？うん……あつ！もしかして木村くんのこと？」

頭をコテンと少し傾けて考える様にして、その後思い出した様に

答えた。

……まさか悠司の名前を忘れてるって、しかも予想外の回答きやがった。

「いやいやいや、何で今思い出したみたいに言ってるの？貴女が好きだった相手でしょ、しかも疑問係で返すなよ」

「え〜だつて、忘れてたんだもん。確かにあの時は好きだったんだけど…ねえ、

あまりにも鈍感過ぎるから、諦めちゃった」

“諦めちゃった”だとめっちゃ軽いなおい、しかも“”って何だよ!“”って!!その前に忘れていたとか、やっぱり忘れてたのかい。そんなに直ぐに忘れるものかねえ〜……………ん? 待てよ、これって………… 良かったな、弟よ チャンスがあるかもよ。

「…………そうか、確かに悠司は鈍感過ぎるからな。たまにわざとじやないかと思うときもあるからな。」

「……………」

当初の目的の買い物忘れて悠司の鈍感さを二人ですつと話し合

つていた
まる

終わり

母親って凄いやね。

ガチャ

「おかえりなさいませ、ご主人様」

金色の髪の色をしたショートヘアの少し幼い顔だちの女の子が扉を開けた瞬間に現れて笑顔で言ってきた。
さて問題です。今俺はドコにいますでしょ？

ヒント

けしてメイドさん達がいる喫茶店には、行ってません。

正解は……………

「そんな格好で何やってるの？母さん」

家でした。解ったかな？

解った人には、後でお兄さんが飴玉あげるからねミートソース味だけど。

えっ？そんな味あるのかだつて？ あつたんだよ、スーパーで買い物していたら見つけたんだよ、面白そうだから買って見たんだけど…………… 一回も食べてないだね、普通に考えたらミートソース味の飴何て食べたくないし、今思うと何で買ったんだろう？ まっ、いか 今度亮輔に食べさせれば、

そうそう話しを戻すけど、玄関を開けたら自分の母親がメイド服を着て出迎えしてるんだよ、あり得ないだろ普通は…………… 年齢が三十路を過ぎてるオバサ…………… 「…………… まーくん、ちょっとO・H A・N A・S H Iする？（ニコツ）」… 母親が着たつて似合わないはずだろ？

だけど似合っているんだよね、困ったことに、見た目が若く見えるいや、若く見え過ぎるんだよ。前なんて一緒に（無理やり連れてかれた）買い物に行った時、ちゃんとした妹さんだね。って言われたんだけど、あり得ないだろ？100歩譲って姉ならまだ分かる。な

「ホントに？」

「本当だから！」

「ホントにホント？」

「本当に本当だから！！」

「じゃあ、今日一緒に寝ようね」

「分かったから……………ハア」

何で否定しないの？と思ったと思ったでしょ？ 大変何だよ、
否定すれば折角泣き止みそうなのに、今度は完全に泣くんだよ！そ
したらなかなか泣き止まないだよ……………ハア。

話は変わるけど、いやそんなに変わらないか……どっちでもいいや、俺の母親は、人気アイドルグループが所属している会社の社長で家には、ほとんど帰ってこないだよ。だからって油断してた。クソッこんなことなら亮輔（変態）の家に泊まれば良かった。

話がズレたか、そのアイドルグループは、全員が（とはいっても3人だけ）高校生でその内の1人が内の学校にいるらしい。勿論変装は、している。

以上、昌哉でした。

思わなかったわ。

「じゃあ、後2時間は待てよ。」

「……分かった。……ん？あれ？1時間増えてるような？」

渋々納得した後に、口元に人差し指を置いて首をコテンと傾けて、考える様にして思い出したみたいに言ってきた。

チツ、気付きやがったかこうなれば、奥の手

「気のせいだって、あんまりそう言う事言つと、一緒にね……」

「気のせいだよな。うん気のせい！時間になるまでテレビ観てるね。」

トタトタとテレビがある方に行った。

「これだから…」

ピピピッ、ピピピッ、ピピ　ガシッ

目覚まし時計が鳴り、止め上半身を起こして身体を伸ばした。

「くうう、あゝ寝みい。」

昨日は、あのあと一緒に寝たのは良かったんだよ、いや良くはないけど、まだな、寝るだけなら、布団に入ってから、3時間位仕事の愚痴を言つて満足したのか、俺の右腕を抱き枕にして寝やがった。そのお陰で、2つの大きな山が、ね？それはまだ、ましなんだよね。毎回やってくるから、しかし、我ながら変なことに耐久出来ちゃったな？まっいいや、

ふと、時計の方を見ると7時30分だった。

「久しぶりに弁当でも持つていくかな。」

毎日昼は、学校の購買で買ってるから金かかるし、あゝ弁当作るの面倒くせえ、作らせるかな？などを思いながら階段を降りてリビングに向かった。

ハルがテレビを見ながら、朝食を食べてた。俺が降りてきたのを気付いてこちらを向いた。

「あつ、兄貴おはよう。」

「ハル、はじめに言っとく、ありがとう。」

「な、何が？」

キョトンとした顔で聞いてきた。ここは、やはり笑顔で

「弁当作って」

「嫌だよ!!……って弁当なら、母さんが作ってくれたみたいだよ、俺たちの分。」

ほら、と言ってキッチンの方を指差しキッチンの方を見ると2つ弁当箱があった。………うん。今日は、生徒会の人に分けてもらおう。けして、母さんの料理が下手で壊滅的な味という訳でなく、どちらかというと普通に旨い分類に入るでも弁当にいらんデコレーションがあるんだよ。ということだ

「やっぱりらないわ、ハルにあげる。お前なら食べるだろ?マザコン。」

「いや、さすがに2つは無理だよ!!」

すぐさま否定してきたしっかマザコンの部分はスルーかよ

「せっかく、母さんがハル為だけに作ったのに残すのか、あくあ

わざと為にを強調して言ってみた。ハルはマザコンだから効果は

抜群のハズ

「俺の為に……」

ハルがぶつぶつ呟いていた。あと一息だな

「悲しむだろうな」もしかしてハルのことき「」2つ食べるよ！
……」

ニヤリ、予想通り。さすがは、マザコンだな。……はっ！！もし
かして彼女が出来ないのって（……………）

って面倒くせえ、何で朝からハルのこと考えなきゃいけないんだ。

ふぁー 寝みい

そう言えば、母さんはもう家にいなかった。どうせ今月はもう帰
って来ないだろう。社長だから忙しいだろうし。

キーンコーンカーンコーン

起立、礼。

四時間目の授業が終わり、学級委員の人が号令をかけた。さて、生徒会室にでも行って食料調達にでも行くかな？そう思い席を立とうとすると、話をかけられた。

「あれ？今日は買ってきてないの？」

大地が弁当を持ちながら近付いてきた、爽やかな顔しながら

「死ねばいいのに」

「ちよっ、いきなりひどくない!？」

「あ？声に出てた？わりい、気にするな本音だから。」

「本音！？本音なのかよ！気にするわ！！」

「全く、弁当を持って現れたと思ったら、人の席の近くで騒ぐなよ周りに迷惑だろ。」

はあくこれだから、イケメンは困る。

「原因はマサだろ！！」

まだ、騒いでるし、つーか腹へった早く生徒会室に行って食料調達しなきゃな

「じゃあな、俺は食料調達に行ってくるわ。」

そう大地に言い扉の所まで行き開けようとしたら、自分が開けようとする前に開いた。

ガラガラ

「あつ、昌哉さん。ちょうど良かった、これお兄ちゃんに渡してもらえますか？」

扉の向こうには、悠司と同じで少し茶色がかった髪色で長い髪をサイドテールにしている、美少女が持つていた弁当をこっちに向けている。わかっている通りこの美少女はリア充こと、悠司の妹さんです。この妹さんは、”実は、私たちには血縁関係がない義兄妹なんだよ。”とかを言う程の重度のブラコンだった。っと言っても、兄は兄で重度のシスコンだからな……なぜ、”だった”というところ、最近、悠司に対して冷たい態度をとっているんだよね、ツンデレか？と思っただけ、違うらしいんだよね、前なんて、悠司が抱きつかうとしたら、”いや、触らないで！！”ってめっちゃ拒絶してたし、それを聞いた悠司は真っ白になってたけど、あの時の顔は面白かったなあ、写メ撮っておけば良かった。

……ん？ちよつと待てよ、もしかして最近のツンデレはツンが10で残りの0がデレなのか！？　な訳ないか、妹さんは1年生でハルと同じクラスらしい

悠司に弁当を渡せと……ここは、やっぱり美少女の頼みだから……

「だが断る。」

うん、やっぱり断るのが一番だな。楽しようという考えが甘いんだよ。社会は、そんなに甘くないことを教えてあげないとな特に後輩にはな。

「悠司の妹さんや、それぐらい自分でやりなさい。俺はこれから生徒会室から食料調達するという大事な任務があるんだ、それに悠司は妹さんが直接渡せば喜ぶだろ？うざいくらいに。」

「そうですね…」

少し考えてから

「…それなら、コレ食べて下さい。」

と、こちらに弁当を渡した。

は
？

面倒くせえ」

うん。さっきのは聞き間違えた。そうにきまっている。絶対にそうだ。よし、速く生徒会室に行くか。っとその前に

「おい、悠司いっ！妹さんが呼んで……」

「莉緒おっ！！」

さっきまで、窓側に居たのにもう近くにいるし、シスコンってスゲーな……っ！か最後まで言わせるよ。

悠司が両手を広げて妹さんめがけて突っ込んできた。

「いや！来ないで！」

スカッ

妹さんは悠司が走って自分に向かって来てるのを見て明らかな拒絶反応を見てせた後にそれを避ける様に俺の後ろに隠れた。

ドンッ

悠司は妹さんが避けたことによって勢いよく壁に激突していた。

「昌哉さん。怖いですう……」

妹さんはそう言いながら俺の制服の左袖を掴んでいて目には、涙が溜まつていた。………ちよつと待てよ、こんな所悠司に見られたらヤバくね？悠司の見方によつては、俺が泣かせている見たいに見えるんじゃないかね？普通に見たらありえないけど、悠司シスコの視点なら都合の良いように変わるといふ意味不明なことが起こるからな、速く逃げなきゃ危ないな

ふと悠司の方を見ると物凄い殺気を放ちながら相こちらを見ていた。

「………ほう、人の妹に手を出した挙げ句泣かせるとは………覚悟は出来てるんだろうな。」

………ほらな、どつから見たら俺が泣かせている様に見えるんだよ！明らかに助けを求めているだろうが！！これだからシスコは………いや待てよ

「悠司、お前の為に妹さんがわざわざ弁当持ってきてくれたらしいぞ」

わざと”為に”を強調して言うと殺気が無くなった。後は妹さんが悠司に弁当を渡せば完璧だな。

妹さんを悠司の前に立たせた。もちろん、妹さんに触れた訳だが、その時に殺気が放っていたが、気にしないでおく。

「本当かい？莉緒？」

悠司が笑顔で妹さんに聞いていた。

「これは、お兄ちゃんにじゃあなくて、昌哉さんの為に持ってきたの!!!」

………は？………何言っているんですかあなたは？最初に悠司に渡せと言っていたでしょうが！？んなこと言ったら、さつきよりも凄いことになるだろ！

「………ほう。つまり、莉緒は俺に渡すハズの弁当を貴様に脅されて渡せなかったから、泣いていたのか。………やはり、貴様は殺さないといけないみたいだな」

さつきの会話でどんな解釈したら、そうなるんだよ！？

やはりさつきよりも一段凄い殺気を放ちながら殴ってきたが殴って来るのは、予想出来たので避けることが出来た。

危ねえ、こんなところにいたら、命がいくらあっても足りない、こ
ういう時は逃げるが一番！

そう思い走って逃げるが案の定、悠司が追ってきた。

「待てや！ゴリアー！！！」

あ~~~~~シスコンは面倒くせえ~~~~

面倒くせえ〜（後書き）

気が付けば、お気に入りが増え10人以上になりました。

目標にしていた10人が達成することができました。

皆様、本当にありがとうございます。

これからも、よろしくお願いします。

「ねえ、開けてくれない？入れないんだけど」

今は、生徒会室の前に来ているんだけど、中から鍵をかけられて入ることが出来ない何故かというところ…

「うるせえ！！ここは、生徒会役員以外は立ち入り禁止だ！！況して貴様なら尚更だ！」

そう、このお兄さんが開けてくれないんだよね、このお兄さんの名前は、東 京太郎。同じ2年生だ。

「腹へったから、なんか頂戴」

「何故、俺が貴様に食料を与えなければならぬ、仮に食料があっても貴様には、絶対にやらん！」

「なら、中に入れて、他の人に頼むから。」

「駄目だ」

中には入れてもらえないようだ。

仕方ない、強引に行くしかないな。

ポケットから、手紙を取り出した。

「なあ、ちょっと聞いてくれかい？これは、とある中学生が好きな人に書いた手紙なんだ。【君のことをi…】」

バンッ

手紙を読みだすと、勢いよく扉が開きた

「き、貴様！そ、それをどこで！」

「さあ〜ね、」

鬼の形相で睨んできたが、サラッと流した。

「さてと、取り引きでも、しょうか？コレを渡して欲しいなら……解る、な？」

「くっ、…生憎だが、弁当ならもうない！残念だったな」

「なら仕方ないな、俺も鬼では、ないからな。」

そう言うと、手紙をヒラヒラ揺らしながら

「これを校内放送で流すしかないじゃないか。」

「貴様は、鬼か！？」

ひどいこと言うな、ネットに載せる所を、校内放送までに下げたのに……

「あまり、

ウチの役員を苛めないでくれるかな？」

生徒会室から、黒髪でショートヘアのスタイルが良い、美人の女性が現れた。

「やだな〜これは、苛めてるんではなくて交渉をしてるんですよ。結城先輩。」

この人は、結城 夏希。3年生で、生徒会副会長。とは、言っても生徒会の実権はこの人が握ってる。

「フハハハハハ、油断したな！」

結城先輩と話していたら、手に持っていた手紙が奪われていて、それを持ち高笑いしながら、走って行く京太郎の姿があった。

まっいいか、家に帰ればコピーがあるし、

「という訳でください。」

「どういう訳が分からないけど、主語がないわよ。何となく分かるけど、ついてきて。」

結城先輩の後に続いて生徒会室に入った。

油断したな！（後書き）

皆さん、ヤンデレって好きですか？

シスコンは一人でいい！

生徒会室に入り、机が向かい合わせに3列あり、いかにも生徒会室って感じに並んでいた。そして何故かソファがあり、ここに何時も座っている会長がいなかった。

「そう言えば、会長いませんね？」

結城先輩は振り向いた。

「そうなのよ！遥香ったら、仕事あるのに何時も抜け出したり、来なかったりするのよ！信じられないでしょ！？会長なのに！！確かに居ても邪魔だけどね、でもそれとこれは、違うと思わない？違うと思うでしょ！？この前なんて……」

会長が見当たらないから聞いて見たら、凄いことになった。

……大分ストレスが溜まってるんだな、結城先輩でも流石に。でも会長は、全生徒から絶大な人気があるからな、特に男子からが半端ない人気があるし、集会の会長の挨拶なんて、アイドルのコンサート並みに凄いらな。それに加えて、スタイルが抜群、ルックスも……うん、言わなくても分かるな？そんな人を解任なんてしたら

大変なことになるから出来ない。見てみたいけど、そんなこんなで全部結城先輩の所に皺寄せがくるといふ事になるため生徒会の権限は、殆ど結城先輩が握ってる事になってる。その結城先輩は何故だか女子生徒からの人気が半端ない”お姉様”の愛称で何回も告白を受けている。

気付けば、結城先輩の愚痴が終わっていた。

「ごめんね、愚痴を聞かせちゃって」

申し訳なさそうに謝ってきた

「いえ、気にしないでください。それよりも、」

正直全然聞いてなかったから、全く知らんし

「あつ！そうだったね、忘れてたよ。おにぎりでもいいかな？それしか残ってないんだよね。」

「なんでもいいです、食べるなら」

「ちょっと待っててね、持ってくるから」

そう言うと結城先輩は奥の部屋に入っていった。

「あ、あの！これよかったら、食べますか？」

アホ毛がピョコつと生えている橙色した髪の子学生徒がサンドイッチを差しだしてくれた。

「おっ、くれるの？」

受け取るうとしたら物凄い速さで、何者かに取られた。

「お前が、友香の作った料理を食べるなんて100万年はやいんだよー！」

わっははは、と言いながら奪い取ったサンドイッチを食べた。

「お兄！、すみません、先輩。」

それを見た友香は、自分の兄に対して怒り、直ぐに昌哉に謝った。

「何を謝ってんだ友香？このウジ虫に対して謝る必要なんてぞ、
アイツが友香の作ったサンドイッチを食おうとしたのがいけねんだ
よ」

57

兄は自分の妹が謝っているのを見て自分の考えを言っていた

忘れてた、ここにもシスコンがいるんだった。それにしてもウジ
虫って、ひでえな（笑）

「お兄がいけないんでしょ！？先輩にあげようとしたサンドイッ
チを食べるから！！」

「どうしたんだよ友香？もしかしてウジ虫になんか弱みを握られてるのか？それなら大丈夫だ、お兄ちゃんが居るから指一本触れさせねから、安心しろ。」

ここでは、俺が弱みを握ってる事になってるし、確かに持つてはいるけどね

「そんな事……ないよ！……うん。ないと思うよ、そんな事は！……」

うん、物凄く悩んでたね。残念ながらあるんだな、これが、ドンマイ！

「じゃあ何でだ？昔は、よく、お兄ちゃんお兄ちゃんと言って後をついてきたのに、風呂だって”お兄ちゃんと一緒にじゃなきゃ入らない”と言ってたじゃないか！？」

「何時の話をしているの？今はそんなこと関係ないでしょ！それ

にそんなこと言った覚えはないよ！？いつも私が遊んでいたら、お兄が突然やってくるんでしょ、お風呂の時だって、お兄が勝手に入って来たんでしょ！？私は、お兄の事を”お兄ちゃん”なんて呼んだことないもん！！”

これはシスコンじゃなくてストーカー？しかも自分の願望が入っているし、さすがシスコン先輩！憧れる。”お兄ちゃん”って言わせるなんて

「……………そうか、照れ隠しなんだな！甘えたいけど恥ずかしんだな！よし、分かった。」

一歩、一歩、兄は妹に近付いた。

どんな解釈したの？せっかく”お兄ちゃん”って言われたのに、気付いてないし

「えっ、ちよっ」

近付いてくる兄に気付いて、逆に一歩、一歩、後ろに下がって行

ったが、壁があり、これ以上下がれなくなった。

「せ、先輩！ヘルプです。助けてください！」

これは、どうするか？

1、助けてを呼ぶ

2、助けてる

1を選んだ場合、自分が労働しなくて手っ取り早くその場を鎮めることができる。

2を選んだ場合、物凄く大変だが、後輩の好感度うなぎ登りに上がる。

1111は

やはり

「ごめん、俺、英語わからないや。」

当たり前だよな、俺日本人だし英語で言われても

「何ですか！？私ちゃんと日本語も言いましたよね！？」

そんな事を言っているうちにシスコン先輩は、目の前に来ていて、手を伸ばした瞬間に

ゴコンッ

国語辞書を持った結城先輩がいた。

「普段は優秀なのに友香ちゃんの事になると……全く」

シスコン先輩は、床に伸びていた。

「昌哉くんも昌哉くんよ、何で止めないのよ。」

ハアとため息混じりに

「無理言わないでくださいよ、止められる訳ないじゃないです
か、逆に俺が何か言ったら、余計悪化しそうです」

「それもそうね。」

はい、これ。中身は鮭だけど大丈夫よね？」

「ありがとうございます。」

「いいのよ、生徒会の仕事手伝ってもらっから」

何！？そんな事があるなんて！

なぐんてね、どうせアレだろ？

つか、伸びてるシスコン先輩を結城先輩がずっと踏んでるんですけど、

「わかりました。放課後悠司連れて来ますよ。」

「さっすが！わかってるね」

「俺と結城先輩の仲じゃないですか。」

アハハハと二人で、笑いあっていたら

「先輩と結城先輩ってそんなに親しい関係何ですか？」

と友香が聞いてきた。

「「全っ然！」」

二人で、ハモリながら否定した。

てか、知り合ってから、一年も経ってねーし

シスコンは一人でいい！（後書き）

最近、ヤンデレが好きになってしまった……

皆さん、クーデレってなんの略ですか？

教えてください。

そもそもこんなのないの？

学校の廊下を歩いてみると、窓ガラスから太陽の光を浴びた。空を見ると雲一つないキレイな青空が広がっていた。

こんな気持ちいい天気を見て思う……

「世界、滅びねえかな？」

「何、恐ろしい事言ってるだよ!？」

昌哉の言葉に大地がツツコミをいれた

「何だよ……人が気持ちよく空を見ていたのに」

ハア、全く と続けて肩をくすめた。

みんなだっと思うだろ？世界が終わる日が、天候が最悪で大雨が降ってじめじめした日より、天気の良い日が良いだろ？どうせなら

ギンギンに晴れた日に最後を終えたいじゃん。気持ち的にも

「アレ？俺が悪いの？」

大地は、困惑していた。

「で？何か用なんだろう？」

「そうだ、次の時間体育じゃん、だから知らせようと思ってな。」

速くしないと教室入れないじゃん。と続けた。

そうなんだよな、体育だから着替えないとならんし、普通は、男子が教室で着替えるだろ？多分。

でも、この学校は逆で”今年から”男子が更衣室で着替えるという風になっている。しかも更衣室は、1クラスの男子が入らないくらい小さめ、2回にわけて着替えないと駄目だ。学校の男子と女子の割合は、7：3 で明らかに男子の方が人数が多い。

以上の点から、速く着替えないと面倒い

「なら、俺の分の体操着を持ってきたまえ。どうだ嬉しいだろ？」

「何故に命令形？つーか嬉しくないわ!!」

持ってきたけどさ、と続けて、体操着を昌哉に渡した。

流石、陸上部のACEだな。ご褒美として、また女子達に追わせ
てやるか。

ブルッ

大地が突然震えだした。

「どうした？そつなに震えて」

「いや、何か誰かが恐ろしい事を考えてる様な気がして」

「……気のせいだろ」

凄いとラウマなんだな。考えただけで、震えだすなんてな、まっ止めないけど。あは

「最初の間は何だよ。」

「そんな事より、速く着替えに行くぞ」

「ん？もしかして、マサか！？」

「……何の事だ？」

「ぜってえ、”女子達に追わせてやる”とか思ってたろ!?!」

チツ、はぐらかせたと思ったのに

「何だ？自分から言つという事は、またやって欲しいのか？俺は、一向にかまわないけど」

「疑つてすみませんでした!」

キレイな土下座で謝ってきた。

俺は疑うからだよ。思ってたけど

「速く着替えに行かないと、混むぞ」

更衣室に向かった

「スゲエ、

マジでこんなこと起るんだ。」

校庭には、体操着に着替えた男子達が出血しながら倒れている姿があった。

7・3 (後書き)

今年最後の投稿だと思います。

確かな

体育の先生が戻ってきて、目の前に拡がる光景に驚愕をした。

「な、何が、…何が起こったんだあゝ！！！」

先生は、天に向かって叫んだ。前方には、四人の男が立っていた。一人は、あたふたしていた。一人は、笑っていた。二人は、言い争いをしていた。その近くには、出血をしながら倒れている、男子生徒の姿が大量にあった。

これが、後に『吉田の悲劇』と言われる事件の始まり……………嘘だ
けどね。

何でこんな状況になったのか、さかのぼる事、数分前

「よし、みんな揃ったな？今日は、いい天気だしサッカーでもするか。」

体操着に着替えて、校庭に集まった後に各自で準備体操をした後に先生が来て、今日行う種目を発表した。女子と合同ではなく、男子が校庭の時は、女子は体育館という風になっている。もちろんあちらの先生は女性で、こちらは、暑苦しいマツチヨのゴリ先生。35歳、独身。

今日は、じゃあないだろ、いつつもサッカーじゃん。

『え〜〜〜〜、何時もサッカーやってんじゃん』

クラスの全員がサッカーをする事に反対した。しかし、それだけでは終わらず、『芸がないんだよ。たまには違うことをやりたい！』までは、不満だけ良かったのだが『だから、結婚出来ないんだよ。』
『どーせ、デートの時も同じ所しか行かないんだろ』 『いや、彼女なんて出来ないって、あんな顔で！アハハハ』などと何故か私生活の事まで文句を言われて、ゴリ先生は、落ち込みその場に体育座りして、の の字を書いていた。

さすがに言い過ぎだって（笑）それに、彼女ならいたらしいし、それにしても、体育座りしながら”の”の字を書くって以外にムズクね？

「みんな、先生が可哀想だろ！！」

悠司が立ち上がり、みんなに注意をした。それと同時にゴリ先生が少し元気を出したが

「いくら、ゴリラに顔が似ているからってそれは、言い過ぎだつて……」

次の瞬間、更に落ち込んだ。それを見た悠司は、戸惑っていた。

あゝあ、悠司が一番酷くない？みんなそこは隠していたのに、本人の目の前ではつきり言ったし、仕方ないここは俺が…

「悠司、お前は座ってる後は、任せろ」

悠司に一声かけて、ゴリ先生の肩をトントンと軽く叩いた。

「先生、どんなに筋肉の鎧を纏っても、自分の弱さ、弱点は隠せませんよ。」

「うわわわわん。そんなこと分かってんだよ！」

それを聞いた途端泣きながら、走り去っていた。

30歳過ぎのおっさんが”うわわわわん”だってよ（笑）

『いや、何でトドメ刺してるんだよ!?!』

クラス全員が息のあったツツコミをした。

「……………てへ」

「……………とりあえず、何をする？ゴリ先生がいなくなったから、
応何でも出来るけど」

大地がみんなに何をするかを聞いていた。

「サッカーでいいんじゃない？」

「やることないし」

「今から準備する面倒いし」

最終的にサッカーをする事になった。

なら、最初っから文句言わずにやれば良かったんじゃない？

バシユ

ゴール

「大地スゲエな、ハットトリックかよ」

その後、半分に別れてチームを作り試合をしていた。相手チームには、大地がいてハットトリックの活躍で、0対4で負けている。こちらのチームは、悠司や亮輔（変態）がいる。普通に考えれば、こんなに差がひらく試合には、ならないはずだが、悠司は、サッカーが余り得意ではないので苦戦をしている。

「残り時間、後7分な！」

「おい、マサもちゃんと動けよ！」

悠司が、余り動かない昌哉に対して怒り気味に文句を言った。

えゝ面倒、……………そうだ！

「悠司こそ、大地に負けてんじゃん」

「……………仕方ないだろ、余りサッカー得意じゃないんだよ。」

「あゝあ、悠司なら、負けなと思ったのにな。」

わざとらしく言った後にチラッと校舎のほうを見た。

（頼む、見ていてくれ！）

ビンゴー！

これで楽しんで勝てる。

「あそこで、見てる妹さんもがっかりするだろうな。」

校舎のほうを指差したところに、ちょうど窓からコチヲを見ている悠司の妹さんの莉緒がいた。
それを見た悠司が少し動揺した。

ニヤッ、あと少し

「せつかく、妹さんが見ているのに負けている姿を見せるのか？ ショックだろうな、兄のカッコいい姿を見る筈が、負けている惨めな姿を見る事になるなんてな、あゝあ、もしかしたら、き」……」

「誰が負けるって？ やってやるよ！」

悠司は、ボールがある方に走って行って、すぐさまボールを奪いゴールを決めた。

スゲエ、実際に人ごとゴールネットにいれる事出来るんだ。もう一人ぐらい必要かな？

亮輔がいる方向に向かった。

「なあ？ 悠司より、点数取ってみない？」

「やだよ、面倒い。自分でやれよ。」

亮輔は、素早く断った。

「実はな、最近面白い情報てにいれたんだよ。」

「ふーん、どんなの？」

亮輔は、話しに興味をもって、続きを聞いた。

「悠司が持つてる、エロ本の隠している場所が分かったんだよ。亮輔が悠司より、点数を取ったら教えてやるよ。」

普通の人には、こんな話しの筈がないが…

「よっしやあああ！！任せろ」

亮輔もボールがある方に向かって行った。

完璧だ。流石俺！

試合が終わり、7対4で冒哉がいるチームが勝ったが…

「俺の方が点数が多い筈だ！」

と悠司

「ぜってえ俺だ！」

と亮輔

この二人が決めた点数は3点と同じなのだが、自分の方が多いとどちらも譲らない。悠司は、自分が一番活躍したのを、妹の莉緒に見せるためにと譲らず、亮輔は、悠司が持つてるエロ本のため譲らないということになっている。ちなみに、一番点数を決めたのは、大地である。二人は知らないが

悠司は妹さんのため、亮輔はどうせ工口本を入手してそれを妹さんや自称西山さん達に見せて、好感度を下げてその後に分分の物にするためだろう。まさか、ここで問題があるなんて!?(笑)

「止めなくて大丈夫かよ、マサがやったんだろ？」

大地が言い争っている二人を見て声をかけてきた

「大丈夫だろ、それに今止めに入ったら大変なことになるぞ」

勇気のあるクラスメイトAが止めに入った。

「ちょっと、落ちつけて二人とも」

止めようと二人の肩に触れた瞬間

「邪魔」

「うるせええ」

悠司が裏拳、亮輔がボディブローを放って、クラスメイトAは、鼻血を出しながら倒れた。

「田中あああ！！」

「いや、誰だよ。」

大地がツッコミをいれてきた。
そこはノリだよ。

俺と大地を除くクラス全員がそれを見てあわてて悠司と亮輔を止めに入っただが次々と倒されていった。

「ぶ、ぶーすんだよ、ね」

で、今にいたる。

ゴリ先生が、悠司と亮輔に説教している。

「おい、戻るぞ」

大地に声をかけてた。ゴリ先生の説教長げえからな、つーか保健室連れて行かなくていいのかよ。

「いいのかよ、黙って戻っても？」

「もう、時間だしそれに長いだろあれは。」

「……確かにな」

確かにな（後書き）

頑張りました。もう無理だと思いますが、今年中にもう一回…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1650s/>

脇役主人公から見た彼ら

2011年12月28日02時00分発行